紀要五〇輯を祝して

院長　深町正信

青山学院女子短期大学が「紀要」第五〇輯を記念号として発刊されることは、まことに大きな感謝であります。私は心から関係者の皆様にお慶びを申し上げます。青山学院女子短期大学は、戦前の青山女学院専門部と、その前身の女子教育の歴史と伝統とを受け継いでいます。青山学院女子短期大学は一九五〇年（昭和二五）に戦後の教育制度の改革により、新しい装いのもとに開設されました。従って、来る二〇〇〇年には、丁度創設五〇周年を迎えることになります。

この「紀要」第一輯の発刊は、一九五二年（昭和二七）でありましたが、その初期の頃には年二回発行され、その後、定期的に年一回の発行となりました。初代の学長の向坊長英先生は、「紀要」創刊号で次のように書いておられます。「諸教授が研究の結果を発表されることによって、世の厳正なる批判を戴き、自らの進路を是正されると共に、惰者に対しては痛烈な刺激奨励となり、この「紀要」が教授団一同の上に、相働きて益となることを信じて疑わない」。この「紀要」創刊時の目的と願いは、それ以降に発行された各号に十分に実現され、また外部からも高い評価を受けていま

すことは大変に嬉しいことであります。

現在は、更に研究環境を整え、一九九一年に発足した青山学院女子短期大学総合文化研究所が一億五千万円の基金をもとに、基金の果実をもって活動し、その研究成果を「年報」として発刊しています。ちなみに一九九六年度の研究グループのテーマは、「職場の女性の情報生活に関する研究」、「フェミニズムと女性の高等教育」、「大学における教育方法研究」と「家族の諸相」であります。「紀要」にも反映の期待がもてます。

一九九五年には「青山学院女子短期大学自己点検・自己評価報告」を作成して、教員の研究について公開し、短期大学の教育と学問研究の質の一層の充実に尽力されています。

現在、日本では、急激な高齢化と高度な情報化、学生の減少、高学歴化が進んでいます。専門的な知識を求めての四年制大学志向がある一方で、「大学、短大も冬の時代」を迎えたと言われます。しかし高等教育機関への進学率が五〇％を超える今日、二年間で次のステップに結び付く教養と学問・技術を得られるという教育内容の二年制大学は、当面四年制大学へ進学しない人にとり、存在意義と使命は今後も大いにあると思います。

二一世紀は「教育の世紀」と言われていますが、四年制大学と二年制大学との単位の互換、短大と短大との単位互換、大学への編入学制度など各部のカリキュラムの改正等、諸問題に具体的に取り組んでいくことこそが課題であると思います。二年間という短期間でも、学問すること、一つの専門教育を研修することができ、かつ有効な資格が取れるという魅力と、青山学院女子短期大学の

特色であるキリスト教に接する教育を展望し、カリキュラムの充実、改正を進めることが大切であります。

終わりに、アメリカの神学者、ラインホルド・ニーバーの祈りの言葉をここに記して、私のお祝いの言葉といたします。

神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気を我らに与え給え、変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与え給え、そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を与え給え。アーメン。